

(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)
総括研究報告書 (H27-医薬 A-一般-002)
危険ドラッグおよび関連代謝産物の有害性予測法の確立と乱用実態把握に関する研究

分担研究報告書 [3年間のまとめ]

様々なフィールドにおける危険ドラッグ乱用に関するオンライン調査

分担研究者：嶋根卓也（国立精神・神経センター精神保健研究所 薬物依存研究部）

研究協力者：日高庸晴（宝塚大学看護学部）

【研究要旨】

[研究テーマ：様々なフィールドにおける危険ドラッグ乱用に関するオンライン調査]

[緒言] 「薬物使用に関する全国住民調査」のような一般住民を対象とした調査では得られない危険ドラッグ乱用状況の詳細を把握するため、本研究では、音楽系の野外イベント来場者を対象とした実態調査を行った。危険ドラッグ使用状況の実態を横断的に把握し、生涯経験率、入手方法、使用場所、使用に伴う健康被害などを明らかにするとともに、過去データとの比較を行い、危険ドラッグ使用経験率等の推移（2015年～2017年）をモニタリングすることを目的とする。

[方法] 音楽系の野外イベント来場者を対象に、携帯端末を用いたオンライン調査を実施した。有効回答数は、2015年 661名、2016年 608名、2017年 553名であった。主な調査項目としては、危険ドラッグの生涯経験率、入手経路、使用場所、使用に伴う健康被害、指定薬物制度の周知状況などである。

[結果] 危険ドラッグの生涯経験率は、2015年（18.4%）、2016年（11.2%）、2017年（10.7%）と有意な減少傾向が観察されたが、大麻や覚せい剤など他の薬物はいずれも有意な変化は認められなかった。これまでの使用回数を「10回以上」とする者が、2015年（21.0%）、2016年（21.9%）、2017年（29.5%）と増加傾向にあった。主な入手経路は「友人・知人から」であり、「自分の部屋」や「友人や恋人の部屋」で使用する者が多かった。危険ドラッグ使用により、かなり具合が悪くなった者や、救急病院や精神科を受診した者もみられた。指定薬物制度の周知率は、2015年（50.7%）、2016年（50.8%）、2017年（39.6%）と低下した。

[考察] 2015年から2017年にかけて、危険ドラッグの生涯経験率は有意な減少傾向がみられた一方で、危険ドラッグ以外の薬物については有意な変化がみられなかった。これらの結果は、社会問題化した危険ドラッグ問題が終息に向かっていることを裏付けるデータと考えられる。ただし、「指定薬物制度」の周知状況が低下していることを示すデータが得られていることから、危険ドラッグ乱用防止に関する啓発活動は今後も継続していくことが求められる。一方、危険ドラッグを10回以上使用する「反復使用者」の割合が増加していることから、一部の危険ドラッグ使用は、薬物依存の状態となっている可能性が考えられる。野外イベント来場者に対して、薬物依存の理解促進を呼びかけることや、依存症拠点病院、当事者が主体となった民間支援団体（ダルクなど）、精神保健福祉センターなどの公的施設における相談・支援の情報を提供していくことは、再乱用防止（特に二次予防）の観点から重要である。

[結論] 本研究により、全国調査では得られない危険ドラッグ乱用実態の詳細を得ることができた。2015年から2017年にかけての経年変化を踏まえると、危険ドラッグ問題は終息に向かい

つあると考えられるが、危険ドラッグ乱用防止に対する予防啓発や、危険ドラッグ使用者に対する再乱用防止対策を引き続き推進する必要がある。

【緒言】

第四次薬物乱用防止五か年戦略(平成25年8月)および、危険ドラッグの乱用の根絶のための緊急対策(平成26年7月)が示すように、現在、危険ドラッグ乱用者による犯罪や、重大な交通死亡事故を引き起こす事案が後を絶たず、深刻な社会問題となっている。

国内における危険ドラッグの乱用状況は、一般住民を対象とした「薬物使用に関する全国住民調査」¹⁾、青少年を対象とした「飲酒・喫煙・薬物乱用についての全国中学生意識・実態調査」²⁾、薬物使用障害患者を対象とした「全国精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査」³⁾などの全国調査が経年実施され、その動向がモニタリングされている。しかしながら、これらの調査は、危険ドラッグ乱用の実態把握に特化されたものではなく、国内の薬物乱用・依存の実態把握という大きな枠組みの中で、危険ドラッグに関する調査項目がいくつか含まれているに過ぎない。したがって、これらの全国調査から、危険ドラッグ乱用状況の詳細を掘り下げていくには限界がある。

本研究では、こうした全国調査では得られない危険ドラッグ乱用状況を把握することを目的として、音楽系の野外イベントの来場者を対象としたオンライン調査を実施する。危険ドラッグ乱用状況の実態を横断的に把握し、危険ドラッグの乱用経験、入手方法、使用場所、使用に伴う健康被害などの実態を明らかにするとともに、過去データとの比較を行うことで危険ドラッグ使用経験率等の推移をモニタリングすることを目的とする。

1) 2015年調査(1年目)

携帯電話やスマートフォンといった携帯端末を用いて、危険ドラッグの乱用実態を把握するオンライン調査システムを開発した。野外イベントでのフィールド調査を通じて、効率的に危

険ドラッグ乱用状況の情報を収集することができた。危険ドラッグを「10回以上」使用した者や、使用によって「かなり具合が悪くなった」エピソードが報告されていることから、対象者の中には、薬物依存や急性中毒のリスクが高い者が含まれる可能性が考えられた。

2) 2016年調査(2年目)

2015年に引き続き、野外イベントでの調査を実施した。2015年から2016年にかけて危険ドラッグの生涯経験率は、有意に減少した。また、「インターネットでの購入」のみが増加していることや、周囲の乱用者が減少している結果を踏まえると、危険ドラッグの入手が困難になっている様子がうかがわれる。一方、危険ドラッグ使用による健康被害や、依存症に対する支援のニーズが確認できたことから、野外イベントでのアウトリーチ活動を通じて、相談・支援に関する情報を提供していく必要がある。

3) 2017年調査(3年目)

野外イベントでの実態調査を継続するとともに、3年間の経年変化を検証した。危険ドラッグの生涯経験率は、2015年(18.4%)、2016年(11.2%)、2017年(10.7%)と有意な減少傾向が観察されたが、大麻や覚せい剤など他の薬物はいずれも有意な変化は認められなかった。これまでの使用回数を「10回以上」とする者が、2015年(21.0%)、2016年(21.9%)、2017年(29.5%)と増加傾向にあった。主な入手経路は「友人・知人から」であり、「自分の部屋」や「友人や恋人の部屋」で使用する者が多かった。危険ドラッグ使用により、かなり具合が悪くなった者や、救急病院や精神科を受診した者もみられた。指定薬物制度の周知率は、2015年(50.7%)、2016年(50.8%)、2017年(39.6%)と低下した。

【総括】

2015年から2017年にかけて、危険ドラッグの生涯経験率は有意な減少傾向がみられた一方で、危険ドラッグ以外の薬物については有意な変化がみられなかった。これらの結果は、社会問題化した危険ドラッグ問題が終息に向かっていることを裏付けるデータと考えられる。ただし、「指定薬物制度」の周知状況が低下していることを示すデータが得られていることから、危険ドラッグ乱用防止に関する啓発活動は今後も継続していくことが求められる。

一方、危険ドラッグを10回以上使用する「反復使用者」の割合が増加していることから、一部の危険ドラッグ使用は、薬物依存の状態となっている可能性が考えられる。野外イベントを通じた危険ドラッグ使用者に対する再乱用防止対策（特に二次予防）も重要である。

【研究業績】

1. 論文発表

- 1) 嶋根卓也, 今村顕史, 池田和子, 山本政弘, 辻麻理子, 長与由紀子, 松本俊彦: 薬物使用経験のある HIV 陽性者において危険ドラッグ使用が服薬アドヒアランスに与える影響、日本エイズ学会雑誌 20(1), 2018. (in press)
- 2) 嶋根卓也: 知っておいてほしい民間支援団体の可能性と課題. 精神科治療学 32(11): 1433-1438, 2017.
- 3) 嶋根卓也: 性的マイノリティ・HIV感染者の理解と支援. 精神療法 43(2): 270-278, 2017.
- 4) 松本俊彦, 船田正彦, 嶋根卓也, 近藤あゆみ: 薬物関連問題とどう対峙するか 疫学研究、毒性評価、臨床実践、政策提言. 精神保健研究 63: 53-61, 2017.
- 5) 嶋根卓也: 危険ドラッグの流行と終息. 最新保健情報資料 2017, 大修館書店, 東京, pp8-10, 2017.
- 6) 嶋根卓也: 自殺ハイリスク者支援(アルコール/薬物乱用・依存症). ワンストップ支援における留意点 - 複雑・困難な拝啓を有する人々を支援するための手引き - 平成28年度自殺防止対策事業「ワンストップ支援のための情報プラットフォームづくり」, 一般社団法人日本うつ病センター, 東京, pp28-31, 2017.
- 7) 嶋根卓也: 青少年における薬物乱用の最新動向~薬剤師は『ダメ、ゼッタイ』で終わらせない関わりを~. Excellent Pharmacy 5月1日号, メディファーム株式会社, 東京, pp7-8, 2017.
- 8) 嶋根卓也: 「ゲートキーパー」としての薬剤師の役割. 医薬ジャーナル 52(2), 101-104, 2016.
- 9) 嶋根卓也: 学校における薬物乱用防止教育. 精神科治療学, 31(5): 573-579, 2016.
- 10) 嶋根卓也: ユーザーに最も身近な相談窓口として~多剤併用を防ぐ薬剤師の取り組み~. 月刊薬事 58(8): 68-70, 2016.
- 11) 嶋根卓也: LGBTにおける HIV 感染症と薬物依存. 精神科治療学, 31(8): 1045-1052, 2016.
- 12) 嶋根卓也: 飲酒・喫煙・薬物乱用. 学校保健における健康課題 特集 学校保健パーフェクトガイド, 小児科診療 79(11): 1657-1663, 2016.
- 13) 大曲めぐみ, 嶋根卓也, 松本俊彦: 日本の刑事施設における薬物依存離脱指導の評価方法についての文献レビュー. 日本アルコール・薬物医学会雑誌 51(5): 335-347, 2016.
- 14) 佐々木真人, 嶋根卓也, 村岡謙行, 長崎大武, 田村昌士, 西村直祐, 堀岡広稔: 薬局薬剤師に必要とされる自殺予防ゲートキーパーの養成とその効果. 高知県薬剤師会報 146: 11-20, 2016.
- 15) 嶋根卓也: 第10章 テンションを上げたい, 嫌なことを忘れたい. 大学生のためのメンタルヘルスガイド~悩む人、助けたい人、知りたい人へ~ (松本俊彦 編). 大月書店, 東京, pp129-143, 2016.
- 16) 嶋根卓也: 市販薬にも安心できないものが

- ある．臨床心理学 増刊第 8 号 やさしいみんなのアディクション (松本俊彦 編), 金剛出版, 東京, pp66-68, 2016.
- 17) 嶋根卓也: 第 1 章 大学生のためのわかりやすい薬物乱用の話．危険ドラッグ問題の表と裏～学生に知ってほしいこれからの薬物乱用防止について～．薬事日報社, 東京, pp11～43, 2016.
- 18) 嶋根卓也: 処方薬乱用者のゲートキーパーとしての薬剤師．YAKUGAKUZASSHI 136(1): 79-87, 2016.
- 19) 嶋根卓也, 舩田正彦: 薬物乱用の新たな波への理解と対応: 危険ドラッグと処方薬乱用. YAKUGAKUZASSHI 136(1): 63-64, 2016.1.1.
- 20) 嶋根卓也: 危険ドラッグ: 夜の繁華街の若者における乱用実態. 日本臨牀, 第 73 巻第 9 号, 1491-1496, 2015.
- 21) 嶋根卓也: 危険ドラッグを使う若者たち. 心理臨床の広場 14, vol.7 No.2, 26-27, 2015.
2. 学会発表
- 1) Shimane T: Epidemic and decline of new psychoactive substances in Japan: Data from nationwide survey on drug use, 2017 Expert meeting, Prevalence and patterns of drug use among the general population(GPS), EMCDDA, Lisbon (Portugal), 2017.6.6-7.
- 2) Shimane T: Monitoring survey of drug use and addiction, and recovery support program in Japan, 17th Drug addiction recovery support, Thanyarak Khon Kaen Hospital(Thailand), 2017.3.22-23.
- 3) Shimane T, Matsumoto T: Reliability and validity of the Japanese version of the DAST-2. CPDD 78th Annual Scientific Meeting, Palm Springs, CA(USA), 2016.6.11-16.
- 4) Shimane T, Wada K, Hidaka Y, Funada M: Prevalence and patterns of the use of novel psychoactive substances, “kiken drugs”, among younger adults at dance parties in Japan. CPDD77th Annual Scientific Meeting, Phoenix, AZ(USA), 2015.6.13-18.
- 5) 嶋根卓也, 大曲めぐみ, 北垣邦彦, 立森久照, 舩田正彦, 和田清: わが国の薬物乱用・依存状況の最新動向: 危険ドラッグ問題の流行と終息. 日本法中毒学会第 36 年会 特別講演, 東京, 2017.7.7.
- 6) 嶋根卓也, 大曲めぐみ, 近藤あゆみ, 米澤雅子, 近藤恒夫: 民間支援団体利用者のコホート調査と支援の課題に関する研究: ベースライン調査より. シンポジウム 8 刑の一部執行猶予制度施行以降の薬物依存症地域支援の課題. 第 39 回日本アルコール問題関連学会, 神奈川, 2017.9.9.
- 7) 和田清, 合川勇三, 森田展彰, 嶋根卓也: 薬物乱用・依存症者における HIV・HCV 等感染状況と感染ハイリスク行動に関する研究. 平成 29 年度日本アルコール・アディクション医学会学術総会, 神奈川, 2017.9.9.
- 8) 嶋根卓也: 薬剤師向けゲートキーパー養成研修とその介入効果: 身近な相談窓口としての薬局 第 16 回日本外来精神医療学会, 神奈川, 2016.7.10.
- 9) 嶋根卓也: そして危険ドラッグを使う人はいなくなった: 全国住民調査 2015 年の結果より. 平成 28 年度日本アルコール・アディクション医学会学術総会, 東京, 2016.10.7.
- 10) 嶋根卓也: 危険ドラッグ問題の行方: 全国住民調査 2015 年の結果より. 第 22 回埼玉県薬剤師会学術大会, 埼玉, 2016.11.6.
- 11) 嶋根卓也, 日高庸晴, 舩田正彦: 危険ドラッグの乱用実態: 若者が集まるイベントにおけるオンライン調査の試み. シンポジウム 7 危険ドラッグはどうなった? 乱用実態・危険性・その検出, 平成 27 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 兵庫, 2015.10.11-13.